

今年度の口語詩句賞の選考は、すでに月次の選考を経ているため、まず自らが佳作として選出した作品、あるいは見落としていても優れた作品をチェックすることから始まった。次いで、10 作品を通して独自の作者像が立ち上がるか否か、さらには口語ならではの特性を活かしているかということ考虑しながら選考に当たった。また、特選とする作品には1.5点与えても良いという規定があったものの、作品のタイプやフォルム、あるいは長短なども異なるため、あえて入選は全て1点という評価を与えている。

今回の新人賞となった**吉沢美香**は、俳句定型の骨格に学びながらも、口語という制約を活かすように、独自の感覚的とも呼びうる表現を追求しているように見える。

**朧夜の黒子が動き出しそうに
夕立を見る心臓のやわらかさ
虹消えて眼の中にある水分**

いずれも月次において注目した作品だが、「朧夜」、「夕立」、「虹」などの伝統的な季物と自らの繊細な身体感覚との取り合わせが巧みだ。もし文語的に表現すれば、いわゆる重くれとなってしまうモチーフを、口語を活用することで柔かく、かつストレートに切り取っている。

優秀賞となった**空いう子（江藤裕子）**には、自選された10作品を通じて、すでに自らのフォルムを手に入れているような練達の域さえ感じさせられた。

**春の海一人のための降車ボタン
蚕ふしふしふしと不死嚙み砕く
「人類の敵」に人名麦の秋**

一句目の日常の中の抒情、二句目の言葉の音に着目した奇想、三句目の今日的とも呼べるアイロニーなど、その表現の幅も広い。今後、どのような展開していくのか楽しみな作者である。

次に、奨励賞となった方々の作品を掲げて、若干のコメントを付していきたい。

白野（白野実悠） 奨励賞

約束をしない小指で叩かれる／ Back space キー／離島めいて

どの作品も短歌的な韻律に親和しながらも、柔軟な言語感覚と、それぞれの結句による飛躍が魅力的な作者だ。

桜望子（松浦桜香） 奨励賞

風鈴の内臓部分に満ちる闇

さまざまなフォームや長短など、その作のバリエーションは豊かである。ここに掲げた作品は、言葉によって形象化された非在な虚の世界を立ちあげる一句と言えよう。

長谷川柊香（奥村俊哉） 奨励賞

コンビニは常に明るい敗戦日

どの作品も、俳句的な飛躍や韻律を秘めている。なかでも、掲出作のように、ときおり泌み出すアイロニカルとも呼べる批評性は貴重である。

松下誠一 奨励賞

腕相撲にしては焦げ臭くないか

いずれの作品も俳句のようなフォームを見せながら、決して定型ではない。自由律にも見える作品からは、口語ならではの驚くようなイメージを届けてくれる。

中矢温 奨励賞

天文学は天の文学水紋る

ときおり微細な言葉へのこだわりを感じさせながら、決して難解

になることなく柔かく着地させている。口語ゆえの機知に富んだ作風と言えようか。

こはくいろ（橋田純寧） 奨励賞

わたしはわたしを遠ざけて／生きながらえた、鈴の音がする。

どの作品からも書くことによって「わたし」を手離そうとする、繊細な感覚が光る。決して雰囲気だけではない、たしかな皮膚感覚さえ伝わってくる。

また、今回は入賞を逸したものの次の二者の作品にも注目した。

マズルカ（渡邊早紀）

信じ合うことが自然と出来ていた／放課後二人のじゃんけん戦争

真島しましま（高田皓輔）

産みかけた／桃／のうぶげの感触が／夢に出てきて、出てきて消えて

マズルカの作品に通底する、あえかな青春性と喪失の痛み、また真島しましまの作品にある〈モノ〉への繊細すぎる眼差しなど、どちらも貴重な資質だと思う。どうぞ、これからも書き続けてください。